上高井教育会報

第132号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　竹前稀市
編集人　会報編集委員長　勝山一男
印刷所　須坂新聞社

教育上の問題点を語る

＝第十三回教育懇談会開催される＝

六月二十九日、教育会館において会員五十五名参集のもと、第十三回教育懇談会が開催された。全体会の席上、竹前会長は「我々のまわりには、様々な教育上の問題がある。こうした現状の中、教師としてのあり方等について話し合い、明日からの教育に生かしてほしい」と、挨拶された。引き続いて、三つの分散会に分かれて懇談会が進められた。本年度は、各分散会にレポーター二名をお願いし、一名の方には、「研修のあり方」他の一名には、「教育上の問題」について発表していただいた。それぞれの発表は、参加者共通の悩みでもあり、レポート発表を中心にして、本音で語る話し合いがなされた。助言者の先生からは、現状を的確にとらえた助言をいただき、明日からの教育の方向をつかむことができたように思われた。教師としての使命感に満ちた先生方の姿が印象的であった。

授業を通じて思うこと

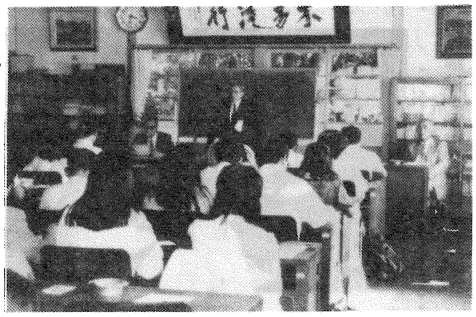
高橋玲子

毎時間、異なった子ども達と顔を会わせ授業が始まる。私と子ども達との関係が、家人と客人の関係であってはならないと常に思っている。教室に入ってから挨拶をするまでの数分で子ども達を見わたしその表情から、気持ちをとらえようとする。それぞれの学級における授業や生活が、音楽の授業に及ぼす影響はかなり大きい。週二時間というわくの中で、授業の構想を考え、組んでおくが、子ども達の心のあり様で意欲がそこなわれたり、大切な話を聞いていないということもある。そんな時は、あせりと憤りと寂しさとが混じり合い複雑な気持ちになってしまう。

音楽を通じて、各自が持っている感性や能力を伸ばし、クラスの仲間と共に音楽を楽しんでほしいと願っている。そして、『音楽が好き』という子がひとりでもふえることを望んでいる。

心のゆとりを失った時、授業の適時、適所で子どもの良さを見てとり、ほめることは難しい。子どもの気持ちに寄りそった指導ができるように、音楽教師としての技能、指導力を高めると共に、人として暖かさを持てるよう、心の修養を積んでいきたい。

（豊洲小）



悩みを語り、実践を深める研修のあり方

渡辺靖

教師として力がないから、いつも感じることがある。子どもたちを高めるためには、私自身が学んでいかなくてはならないと。子どもたちを目の前にした時、願いが生ずる。しかし、そのためにどうしたらよいかわからない時がある。勉強不足だと言われればそれまでだが実際困ってしまう。

三年前、前のクラスを担任していた時のことである。本で「腕立て開脚跳び」の指導法を知った。クラスで実践してみると、跳べなかった五名の子が二十分位の間に次々と跳べてしまうではないか、跳べた子は大喜び、大きな拍手がおこった。知っている人には何でもないことだろうが、自分の無知を痛感した。

そしていくつかの研修会に参加し、同じような悩みを持つ仲間と知り合った。互いの実践、先行実践から学ぼうとサークルを作った。月に二回程の例会を持ち、持ち寄った実践を報告、批判している。

私は現在五年生の担任である。そして私のクラスに全く泳ぐことができない子がいる。水に対して恐怖心を持ち、眼も開けられない状態だった。何とか浮けないものかと思っていた矢先、雑誌に指導法が載っていることを教えられた。指導して三時間目、背浮きができるではないか。その子の顔からも笑みがこぼれた。

まだまだ未熟ではある。いろいろな場で学んでいきたい。

（日野小）

登校拒否の解消を願って

小林宣章

日頃、話題になっている生徒の登校拒否が年々増加している現状は、我々教師にとって見捨てておけない重大な問題と改めて認識する必要があると思います。

教師は自分の担任する生徒の中に登校拒否の生徒がいると、不名誉な事と考え一生懸命に登校刺激を繰り返す事があります。しかし神経症的拒否をする生徒には逆効果になる事が殆どだそうです。担任一人の責任では物理的にも対応できるものでもありません。つまり学校ぐるみの共通理解により、対応する事が大切だと思います。また生徒に対しても共感的理解が最優先されなければなりません。ただ「怠け」「わがまま」「家庭無理解」などと頭から決めつけたのでは良い対応ができるはずがありません。悩んでいるのは学校や家庭ばかりではなく、本人が一番悩んでいる事を理解すべきかと思います。更に登校拒否という形でしか今の弱い自我を保護するすべを知らなく、他人の目を気にしながら家に閉じこもっている行為には自責の念に満ちていることや、不安定な情緒と同居しているのだという事を理解したいと思います。そして一日も早く、全面解消とまでは行かなくても、我々教師が解消の方向に心を向ける努力をして行きたいと思います。

（墨坂中）

懇談抄

第一分散会

司会　長谷部貞夫（常盤中）
発表　高橋　玲子（豊洲小）
　　望月智恵子（仁礼小）
助言者
　　田中　稔　常任委員
　　（井上小）
出席者
　峰村　雅彦（栗ガ丘小）
　返町　孝子（高山小）
　篠原　恵子（須坂小）
　駒津　博子（小山小）
　小林登志子（日滝小）
　栗原　清恵（井上小）
　松本　章平（高甫小）
　伊藤　幹高（豊丘小）
　芦部　絵理（小布施中）
　島田　昌英（相森中）
　丸山美恵子（墨坂中）
　小沢　陽子（東　中）

レポートに関係させながら、次のような話し合いがされた。

○教材を教えこむのでなく、子供たちに寄りそっていくにはどうしたらよいか。そういう研修の場がほしい。

○個別指導をする時間がほしい。放課後、会議等がよくあって忙しい。

○諸行事が精選されてきているが、もっとできないものだろうか。校内だけでなく、郡としての行事も考えてほしい。

○目的意識がなくて行った研修は身にはいらない。目的意識があったものは楽しい。

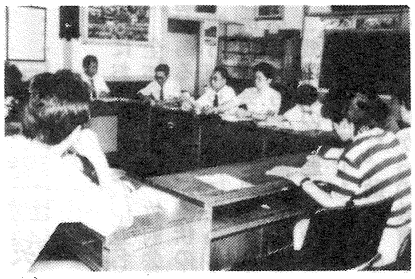
○体を使える、話を出せる、コミュニケーションのある研修がほしい。

○校内の中でできる研修（先輩の先生方にもいろいろ教えてもらう）をもっと充実させたい。

〔助言者の先生から〕

○学校に来ているからには、学校でつけられる力をつけてあげたい。

○てっとり早く生きる研修というのは、子から出発している研修だという意見は興味深い。



○ここへ来たことが自分にとってどんな意味があるか。自分なりに意味を見つける。それが自分を鍛えることにもつながるのではないだろうか。

○授業と関係のない研修をすることも大切である。

○教師自身もいろいろな体験をすることが大事。教師が楽しくなれば子供も楽しくなる。

（記＝渡辺）

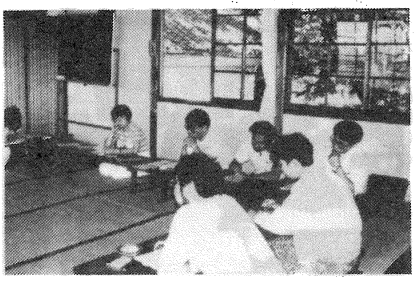
第二分散会

司会　涌井二夫（日滝小）
発表　渡辺　靖（日野小）
　　久保田英雄（高山中）
助言者
　　藤本　守　常任委員
　　（高山中）
出席者
　関口　博子（栗ガ丘小）
　浦沢　恵里（高山小）
　服部　英明（須坂小）
　依田　章（森上小）
　山田　徹（井上小）
　佐藤　綾子（旭ケ丘小）
　前角　増次（仁礼小）
　小林　嘉明（小布施中）
　西沢　啓子（常盤中）
　和田　昭子（相森中）
　島田　一生（墨坂中）

〔出席者からの発言〕

○新卒なので何でも知りたい。時間的余裕がないが、やりっぱなしの研修にならないようにしたい。

○自分自身、子供たちに対してすじの通った指導ができるようにするための研修の必要さを感じる。



○今一番ほしい研修は方法（こうすればこうなる）ではなく、その基盤になっているものを見つめ直せる研修。

○このまま教師を続けていって何が残るのか。何を柱に生きていくのか。毎日、見続けていきたいものは何なのかをはっきりつかみたい。

○子供が見えない時は、まわりの先生方から学ぶ。

○崩壊している家庭。学校・教師のできることは何だろうか。

〔助言者の先生から〕

○「自分の人間を高める」研修の大切さ。ふだんの仕事以外で一生かけてとりくんでいるものがあると、そこからにじみ出てくるものがある。そこに味・広さがある。今まで見えなかったことが見えてくる。

○帰宅して机に向かうと、すぐそのことができるように、本などをいつも置いておく。しやすい環境を作っておくことが、自分自身のあり方に関係してくる。

○ふだんの仕事の中で、自分自身の課題をもって進めて、自分のあり方をクリエイティブにしていく。

○とことん話し合える仲間を見つけておく。（記＝平野）

第三分散会

司会　青木貞夫（旭ケ丘小）
発表　小林宣章（墨坂中）
　　千野敏彦（小山小）
助言者
　　堀籠　悦雄常任委員
　　（日滝小）
出席者
　高原　清子（栗ガ丘小）
　橋本　覚（高山小）
　小林　みか（森上小）
　北沢　晃（豊洲小）
　須山かよ子（日野小）
　宮本　礼子（高甫小）
　小口　正実（小布施中）
　五井野恵子（高山中）
　松本　博人（相森中）
　月岡　広行（東　中）

発表者がレポート発表をした後、参加者全員から、一言づつ現在の自分の持っている悩み、研修のあり方などについて発言してもらった。

○研修はとても大切で必要だとは思うが、それに時間をとられて子どもと接する機会がとれない。午後の会議が毎日のようにあるのも問題である。

○午後時間に余裕がなく、教材研究や子どもの作文など家に持ち帰ることが多い。

○研修会などはすぐ役立つ内容のものもあるが、参加しても実のない研修もある。押しつけの研修会が多い。

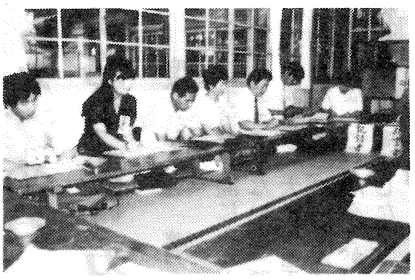
○外に出て研修するよりも、自分の力で研修する必要性があるのではないか。

○研究授業などが多くて時間にゆとりがない。仕事の中身の精選が必要。

○研修の中には内容のないものもある。学級や授業ですぐ役立つ内容がありがたい。研修の内容を役立てるには自分の努力も必要だが、そういうやる気をおこさせる内容の研修が必要。

〔助言者の先生から〕

「研修とは何か」それは「教師とは何か」ということにかかってくる。現在の高学歴社会では父母も知識が豊富である。教師と呼ばれるには次の三つの力が必要である。



一、子どもが見える。
一、子どもがわかる。
一、子どもに対策をたてられる。

この三つの力をつけるために研修はある。すべて子どもから学ぶことが必要ではないか。

（記＝広瀬）

編集後記

第十三回教育懇談会特集号をお届けします。

取材をしながらも懇談の内容に引き込まれ、メモを忘れて話し合いに参加したくなる程、自分の見識を広くさせてくれた会でした。語り合えるこの会が私達にとって大切な研修になったと思います。

当日、基調提案をされ、忙しい日程の中で原稿をお寄せ下さった先生方、ありがとうございました。（渡辺・平野）